

Theme/Rheme 分析の二つの立場

—J. Firbas と M. A. K. Halliday —*

福 田 一 雄

1. 序—Theme/Rheme の定義

Hajičová (1983, p. 269) に紹介されているように、チェコの言語学者 J. Firbas は、プラーク学派の創始者 V. Mathesius の後継者の一人として、Communicative Dynamism (CD) の概念を中心に据えた独自の研究を發展させている。一方 M. A. K. Halliday (1967) は、プラーク学派の伝統的概念であった Theme/Rheme を英米の言語学者達に紹介した最初の英国人学者である。互に影響し合いながらも、Theme/Rheme に関する二人の分析法はかなり違ったものである。福田 (1983, pp. 106-8) で簡単に触れたように、この違いは Theme/Rheme の定義の仕方による。もう一度整理するならば、Firbas の定義は次のようなものである。

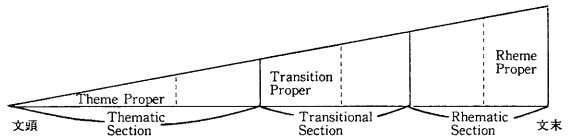
(1) Theme: the elements carrying the lowest degrees of CD

Rheme: the elements carrying the highest degrees of CD

(Firbas 1966^b, p. 240)

同様の定義は Firbas (1966^a, p. 270; 1982, p. 99) においても見られる。CD すなわち Communicative Dynamism とは、文要素がコミュニケーションの展開に寄与する程度、換言すればコミュニケーションを押し進める (push forward) 力の程度であると定義される (cf. Firbas 1966^a, p. 270)。この CD とは、各文要素が保持する「情報価値」(informational value) と言いかえても良いであろう。さらに Firbas 独特の分析法として、彼は Theme/Rheme の二分法をさけて、次のような CD のスケールによる分類をしている。

(2)



Thematic Section でもっとも CD の程度の低い要素を Theme Proper (ThPr), 一方 Rhematic Section でもっとも CD の程度の高い要素を Rheme Proper (RhPr) と呼ぶ。Transitional Section は CD の程度において両者の中間であり、Transition Proper (TrPr) には動詞の TMEs (Temporal and Modal Exponents) が含まれる。つまり、動詞の時制および助動詞の意味などは、それらを強調するための対比強勢がない限り、常に Transition Proper である。Be 動詞は TMEs の表示がその主な機能であるから、Transition Proper である。(2)で示した CD のクレッシェンドは、CD の基本分布 (basic distribution of CD) と呼ばれ、右方向へ行くほど CD の程度は高くなっている。しかし、この基本分布はいわば深層の語順と言うべきもので、実際の文の表層の語順は必ずしもこの基本分布に沿ったものではない。このことは Firbas の認めるところである。文の文法構造や意味構造が、この基本分布に沿う場合もあれば、そうでない場合もある。ただし重要なことは、英語においても、この基本分布 (Th→Tr→Rh) へ合致しようとする強い傾向が見られるということである。

(3) The man (ThPr) in the room (rest of Th) was (TrPr) shot (rest of Tr) to death (Rh to the exclusion of RhPr) by an assassin (RhPr).

(4) A girl (Rh) came (Tr) into the room (Th).
(Firbas 1966^b, pp. 241-43)

(3)は CD の基本分布に完全に合致している。CD のク

レッシュェンドゥも明らかである。一方(4)はCDの基本分布に完全に逆行している例であり、文頭から文末へかけてCDの程度がディクレッシュェンドゥになっている。(4)の意味構造(「出現する現象」+「出現自体」+「出現の場所」)がCDの基本分布にカウンターに働いている。

もっとも重要なことは、Firbas の Theme+Transition+Rheme は、CD の程度 (=情報価値の高低) に基づいて定義されているということである。このことから予測できるように、Firbas の関心事は各文要素間のCDの相対的高低の決定にある。彼はそれを次のように比喩的に表現している。

- (5) In connection with rises and falls in CD within the sentence, it is perhaps not quite inappropriate to think of a *relief-map showing the elevations and depressions of the earth's surface.*

(Firbas 1961, p. 97, note 6)

つまり、各文要素間のCDの程度の高低を立体的な地形図にたとえている。Firbas のこのような立場は、次に述べる Halliday の立場と大きく異なっている。

Halliday の Theme/Rheme の定義は以下のようである。¹⁾

- (6) Basically, the theme is *what comes first in the clause.* (Halliday 1967, p. 211)
- (7) It is the FSP element that is realized by *first position, and has nothing to do with previous mention.* (Halliday 1974, p. 53)
- (8) The Theme is the element which serves as the *point of departure of the message*; it is that with which the clause is concerned. The remainder of the message, the part in which the Theme is developed, is called in Prague school terminology the Rheme. (Halliday 1985, p. 38)

Halliday は文頭という位置を Theme が具体化 (realize) される場所であるとし、Theme 以下のすべての要素を Rheme とする。Halliday (1974, p. 53) も認めるように、この立場はチェコの学者 Trávníček の考え方と基本的に同じである。Firbas (1974, pp. 23-4) によれば、V. Mathesius は「Theme イコール Given Information」と考えていたが、一方、「文頭イコール Theme」とする立場が Trávníček であっ

た。Firbas (1966²⁾, p. 274) は、Trávníček を批判して、'object of thought' と Theme を結合して、Theme は文頭に来るという立場は、いまだ科学的に解明されていないもので、認め難いと言っている。なお Firbas (1965, p. 174) は、E. Benes を援用しながら、文頭要素は 'basis' を与え、thematic な要素は 'foundation' を与えるとして、二つを区別している。

さて、次の文を Mathesius 的立場、Halliday および Trávníček 的立場、そして Firbas の立場から分析してみよう。

- (9) A girl broke a vase.

(9)は各要素がすべて New なので、「Given イコール Theme」とする立場では Theme のない文になる。一方「文頭イコール Theme」論では 'A girl' が Theme で残りの部分がすべて Rheme である。Firbas は(9)のような 'All-New' の文では、意味論的ファクターにより分析する。(9)は 'actor+action+goal' であるから、CD(actor) < CD(action) < CD(goal) のルールに基づいて、a girl (Th), broke (Tr), a vase (Rh) のように分析する。Firbas ではCDの程度の最終決定 (つまり彼の考える Functional Sentence Perspective: FSP) は、文法的ファクター (文の線性)、意味論的ファクター、文脈的ファクター (ある要素が文脈依存か文脈独立か) の三つのファクターの相互作用 (interplay) によるものである。²⁾ 例えば次の各文は、Halliday の分析では、文頭要素がすべて Theme であり、残りの部分がすべて Rheme であるのに対して、Firbas では、微妙に違って来る。

- (10) $\frac{\text{The girl}}{\text{Th}} \quad \frac{\text{broke}}{\text{Tr}} \quad \frac{\text{a vase.}}{\text{Rh}}$
- (11) $\frac{\text{The girl}}{\text{Th}} \quad \frac{\text{broke}}{\text{Rh}} \quad \frac{\text{the vase.}}{\text{Th}}$
- (12) $\frac{\text{A girl}}{\text{Rh}} \quad \frac{\text{broke}}{\text{Tr}} \quad \frac{\text{the vase.}^3}{\text{Th}}$
- (13) $\frac{\text{A girl}}{\text{Th}} \quad \frac{\text{broke}}{\text{Tr}} \quad \frac{\text{a vase. (=9)}}{\text{Rh}}$

2. 疑問文の文頭要素について

Halliday は Rheme よりも Theme の方が、より重要な (prominent) 概念であると考えているように思える。そして、彼は Theme にはどのような種類があるかについて、詳しい分析をしている。そこで

問題になるのは、疑問文の文頭要素をどう考えるかである。Halliday の考える疑問文の ‘natural Theme’ は ‘what I want to know’ であり、疑問文の種類によって次のようになる。

(14) The Theme of Yes/No Question: ‘I want you to tell me whether or not’

(Halliday 1985, p. 47)

(15) The Theme of Wh-Question: ‘I want you to tell me the person, thing, time, manner, etc.’

(Halliday *ibid.*)

(14) (15) からわかるように、Halliday は Theme を文要素自体というよりは、むしろ、その要素によって表わされる機能的な意味に求めている。その際重要なことは、彼は文頭要素の CD の程度を全く問題にしないということである。これは彼の Theme/Rheme の定義(6)–(8)からの当然の帰結である。その結果、疑問文の Theme は、文頭要素が示す「Interpersonal な意味」そのものとされる。

ここで Halliday (1985, p. 54) で示された Topical Theme⁴⁾ の概念を検討してみよう。(注意すべきは、Topical Theme はいわゆる Topic-Comment 分析における Topic と一致することである。)

(16) The ideational element within the Theme, then, is some entity functioning as Subject, Complement or circumstantial Adjunct; we shall refer to this as the TOPICAL THEME, since it corresponds fairly well to the element identified as ‘topic’ in topic-comment analysis. There is no further thematic structure within the topical Theme. さらに Topical Theme に関連して次のような注目すべきルールがある。

(17) The Theme of any clause, therefore, extends up to (and includes) the topical Theme.

(Halliday 1985, p. 56)

Topical Theme になり得る要素とは、分裂文の焦点になり得るものと考えれば良い。つまり ‘cognitive content meaning’ を持つ要素である。

疑問文の文頭要素に話を戻すと、Wh 要素は Interpersonal Theme であると同時に、文中で主語、目的語、Circumstantial Adjuncts の役割を果たすという点で、Topical Theme でもある。Yes/No 疑問文の文

頭の定動詞には、Topical Theme の機能はない。故にルール(17)により次のような区別が生じてくる。

(18) a. $\frac{\text{Who}}{\text{Th}}$ $\frac{\text{killed Cock Robin?}}{\text{Rh}}$ (Halliday 1985, p.48)

b. $\frac{\text{What}}{\text{Th}}$ $\frac{\text{shall I mend it with?}}{\text{Rh}}$ (*ibid.*)

(19) a. $\frac{\text{Can you find me an acre of land?}}{\text{Th Th Rh}}$ (*ibid.*)

b. $\frac{\text{Is anybody at home?}}{\text{Th Th Rh}}$ (*ibid.*)

(19 a, b) が示すように、Can や Is は Topical Theme である主語と共に複式主題 (Multiple Theme) を構成する。さらに (18), (19) の Theme が無標主題 (Unmarked Theme) であることの証明として、有標主題 (Marked Theme) を、その前に置くことができる。(この語順はあまり好まれないが、可能であるとされる。)

(20) a. $\frac{\text{After tea,}}{\text{Th}}$ $\frac{\text{will you tell me a story?}}{\text{Rh}}$

(Halliday 1985, p. 48)

b. $\frac{\text{In your house,}}{\text{Th}}$ $\frac{\text{who does the cooking?}}{\text{Rh}}$

(*ibid.*)

つまり topical な有標主題を前へ置くことにより、それ以下の部分がすべて Rheme 化したことになる。⁵⁾

一方 Firbas (1974, pp. 30-1) は、以上のような Halliday の考え方に、基本的に同意している。疑問文の文頭要素は、話者にとって未知な情報であり、その応答文の焦点になる要素だから Rheme であるとする Krížková を批判して、Firbas は次のように言っている。

(21) ... the question performs a double function: (i) it indicates the want of knowledge on the part of the inquirer and appeals to the informant to satisfy this want; (ii) it imparts knowledge to the informant in that it informs him what the inquirer is interested in (what is on his mind) and from what particular angle the intimated want of knowledge is to be satisfied. It is the second function that determines the rheme proper of the question. In accordance with the requirements of the context, any

element within the question may become rheme proper. The offered solution establishes a coincidence between the bearer of the intonation centre (the most important prosodic feature) and the bearer of rheme proper. It is fully borne out by M. A. K. Halliday's recent interpretation of the function of the question.

(Firbas 1974, p. 31)

長い引用を挙げたのは、Firbas のこの考え方が明らかに Halliday の影響を受けていることを示すためである。ここには Theme/Rheme を機能的意味に基づいて眺める視点がある。

筆者は discourse-initial な Wh 疑問文と、先行文のある Wh 疑問文とでは、Wh 要素の CD の程度が異なると考えている。

- (22) a. What is your NAME?
b. Where do you LIVE?

(22 a, b) のような discourse-initial な Wh 疑問文では、Wh 要素に音調の核は来ず、文末に来る。CD の程度は、文末の要素がもっとも高い。一方、次の場合はどうだろう。

- (23) A: I went to town yesterday.
B: WHY did you go there?

(23 B) では why の CD がもっとも高く、この文は why のみで十分意味が通じる。さらに、(23 B) は、決して contrast の文ではないから、ごく普通の Wh 疑問文として、考察の対象にすべきである。Firbas の Křížková 批判は、(22 a, b) にはあてはまるが、(23) には妥当でない。定義上 CD の程度を問題としない Halliday にとっては、(22 a) の what, (22 b) の where, (23 B) の why は、すべて Theme である。

(21) のように言っている Firbas だが、次の例の分析では、Halliday に同意することはできないであろう。(これは、(23 B) のケースと基本的に同じである。)

- (24) A: "There's a fire!"
B: "Where? Where?" said Goody Blair.

(Halliday 1985, p. 63)

Halliday は "Where? Where?" は "Where is it?" からの省略であるから、Interpersonal Theme としての where だけが残ったと分析する。しかし、残った where の CD は非常に高いと考えられるから、

Firbas はこれを Rheme と認めざるを得ないのではないか。これは Firbas の次の言葉からも推論可能である。

- (25) Sentences can be themeless and/or transitionless, *but unless truncated (left unfinished) they cannot be without a rheme.*

(Firbas 1982, p. 112)

ここで言う「未完の truncated sentence」とは 'He is a...' のようなものであろう。(24 B) は前方照応的省略 (anaphoric ellipsis) の例であるから、それには該当しない。故に rhematic な要素が残り、non-rhematic な部分が省略されたと見るべきである。

以上 (22 a, b) のようなケースと、(23 B) (24 B) のようなケースでは違いがあることが明らかになった。

次の 3~5 節においては、Theme/Rheme 構造に深い関わりを持つ構文を取り上げ、Firbas と Halliday の分析法を比較する。

3. 分裂文と擬似分裂文

- (26) a. It was JOHN who broke the window.
(Halliday 1967, p. 236)
b. The one who broke the window was JOHN. (*ibid.*)

一般に (26 a, b) の文意はほぼ同じとされる。Chafe (1976, p. 37) は、a, b. の John は共に 'focus of contrastiveness' であり、その機能は同じであるとする。Chafe に言わせれば JOHN broke the window. も As for JOHN, he broke the window. も (26 a, b) と同じ機能を果たす contrast の文である。しかし Halliday (1967, p. 236) では (26 a) は、'John and nobody else is the topic of the sentence' であり、一方 (26 b) は 'John and nobody else broke the window' であるとしている。つまり前者は 'thematic exclusiveness' であり、後者は 'cognitive exclusiveness' であると言う。そして (26 a, b) 共、John と window に音調の核を置いた divided focus になることも多いが、single focus の時は、必ず John に音調の核が来ると言う。(本稿では、divided focus の問題は論じない。)⁶⁾

先ず分裂文の焦点要素の分析であるが、村田 (1982, p. 288), 安井 (1978, p. 126) は「特別に強調され、

目立つように仕組まれた Theme」という Halliday (1967) における分析と同じ見方をしている。これは Halliday の Predicated Theme という考え方と関係がある。しかし Predicated Theme は, Halliday (1985, p. 60) では次のように考えられている。

(7)

	It	was his teacher	who	persuaded him to continue.
(A)	Th	Rh	Th	Rh
(B)	Th		Rh	

(A)は字義的な分析であり, (B)はPredicated Theme としての分析である。(B)で Halliday が ‘It was his teacher’ 全体を Theme としている点に注目すべきである。

一方 Firbas の分析では次のようになる。

(8) It was his teacher who persuaded him
 Th Tr Rh Th
to continue.

(cf. Firbas 1975, p. 330)

Firbas が Rheme としている要素と, 音調の焦点との一致が, ここでも見られる。(しかし, 彼が音調の核の有無を, CD の程度の決定の最優先ルールとしているかどうかは疑問である。)

次の例は, 分裂文の焦点要素が exclusive かつ contrastive であることを, もっとも明らかに示している例である。

(9) “Hold on, Jim,” I told him. “It’s *their* house they’re moving into. God helping, they’re not moving into *your and Tom’s* house, are they, Mrs. Frost?”

(E. Caldwell: *Country Full of Swedes*)

次に擬似分裂文について考える。

(10) What you need most is good rest.

(Quirk *et al.* 1985, 18. 29)

Quirk *et al.* は, (10) のように, Wh 要素によって名詞化された部分が主語となり, 焦点要素が補語になる語順がもっとも普通の語順であると述べている。(但しこれは Wh 要素が what の時のみ言えることであり, who, where, when の場合は, この逆の語順が普通であるとされる。) では次の二つの語順を Theme/Rheme 分析の視点から説明するとどうなる

か。

- (31) a. The one who painted the shed last week was JOHN.
 b. JOHN was the one who painted the shed last week.

Halliday (1967, p. 226) は擬似分裂文は, 分裂文同様 divided focus にも single focus にもなり得るが, single focus (つまり information unit が一個の時) の場合には, (31 a, b) の語順に関係なく, 音調の核は identifier である John に来ると言う。

(Wh 名詞化の部分は常に identified とされる。) この場合, Halliday の Theme/Rheme 分析は, 予想されるように次のようになる。

- (32) a. The one who painted the shed last week
 Th
was John.
 Rh
 b. John was the one who painted the shed
 Th Rh
last week.

これは Firbas の枠組では次のように分析されるであろう。

- (33) a. The one who painted the shed last week
 Th
was John.
 Tr Rh
 b. John was the one who painted the shed
 Rh Tr Th
last week.

筆者が (33 b) のように考える理由は次のようである。(33 b) において John は Halliday の指摘のように音調の核を持つこと。そして機能的役割が identifier であり, かつ exclusive で contrastive な要素であること (つまり, John and nobody else)。それらから, John は文頭という位置にもかかわらず, もっとも高い CD を有すると判断するからである。さらに identified である Wh 名詞化の部分は常に何らかの前提 (presupposition) を有する Given な要素と考えられるからである。(だからこそ (10) に対する Quirk *et al.* の指摘のように, Wh 名詞化部分は, 主語の位置を占めるのがもっとも普通なのである。)

次の二例は, (33 b) と同じく identifier が主語になっている。イタリックの部分は Firbas の枠組では

いずれも Rheme と分析されるだろう。

- ③④ He said *the fact that he continued having the recurrent dream* was what was bad;..
(E. Caldwell: *The Dream*)

- ③⑤ *A little physical defect* is what you have.
(T. Williams: *The Glass Menagerie*)

但し脚注7)のii)のような前方照応的な identifier が主語になったケースは、以上の分析では説明出来ないで、課題として残される。今言えることは、おそらく、主語になる前方照応的な this や that のCDの程度は極めて低く、Wh名詞化部分が、その givenness にもかかわらず、相対的に Rheme 化すると考えられるかも知れない、ということである。もしこれが正しければ、脚注7)のii)は Th+Tr+Rh と分析される。

なお、Chafe (1976, p. 37) も指摘するように、分裂文と疑似分裂文の使用上の相違は、いまだ不明なところが多く、今後の研究課題として残される。

4. 存在文

- ③⑥ a. There is a fly in my soup.
b. A fly is in my soup.⁸⁾

Davison (1984, p. 826) は (36 a, b) を比較して、There 存在文中の a fly は非特定の不定 (non-specific indefinite) であるが、(36 b) の a fly は特定の不定 (specific indefinite) であるとしている。さらに彼女は、(36 b) は具体的なハエを locate しようとしている時しか使用できず、単にスープに関して不満を述べているだけなら、(36 a) を使用すべきだと言う。これは興味深い指摘である。筆者の考えるところでは、There 存在文の基本的機能は、rhematic な要素の導入である。(36 b) は rhematic な要素について述べている文だが、(36 a) の方は、あくまで Rheme の導入、提示である。

ところで村田 (1982, pp. 309-11) では、(36 a) の a fly を話題 (Topic) と呼んでいるが、これは New Topic の導入という解釈なのであろう。しかし、Topic は、'given NPs with content meaning' の概念と結合しやすいし、Theme/Rheme の枠組の中では、用語上の混乱を招くのではなからうか。

There 存在文に対する Firbas の分析は次のようである。

- ③⑦ $\frac{\text{There}}{\text{Th}}$ $\frac{\text{was}}{\text{Tr}}$ $\frac{\text{a boy}}{\text{Rh}}$ $\frac{\text{in the room.}}{\text{Th}}$

(Firbas 1982, p. 99)

a boy を Rheme、そして in the room を thematic な Setting とする。一方 Halliday は前方照応の省略の一例として次の文を挙げている。

- ③⑧ "Fire, fire!" cried the town crier.

(Halliday 1985, p. 63)

重要なことは、彼も "Fire, fire!" の部分を Rheme としていることである。そして、これが "There's a fire" からの省略であると説明している。これで Halliday が There 存在文の there を Theme と考え、残りの部分を Rheme としていることが明らかである。There 存在文に関しては、Firbas と Halliday の分析は似通ったものになる。(但し、Halliday は文末の locative を Setting として別に分析するようなことはしない。)

Davison (1984, p. 826) が指摘するように、There 存在文の論理主語 (Notional Subject) は動詞の後方へ回されているという点で受動文の動作主と共通している。特に There 存在文の locative が何らかの理由で前置された時、論理主語は、文末の end-focus の位置に来る。そうすると、受動文の動作主との共通性はさらに高まる。そして、end-focus の結果として、end-weight がかかることは十分予想される。次はリスト文的な例だが、それをよく示している。(なお第一文と第二文とは Contrast をなしている。)

- ③⑨ In Spain there was Guernica! But here there was only hot swing music and liquor, dance halls, bars, and movies, and sex that hung in the gloom like a chandelier and flooded the world with brief, deceptive rainbows...

(T. Williams: *The Glass Menagerie*)

5. 受動文

Creider (1979, p. 6) は受動化を Topicalizing Rule に入れて説明している。一方、Quirk *et al.* (1985, 18. 32) は Postponement の項目に入れている。実は受動文はこの二つの機能を兼備しているのである。

- ④⑩ The bill was paid.

- ④⑪ They are preserved for hunting.

(Granger 1983, p. 305)

- (42) One of the biggest reasons I left Elkton Hills was because I was surrounded by phonies. (J. D. Salinger: *The Catcher in the Rye*)

(40)は the bill の Theme 化, および paid の Rheme 化である。当然 paid は end-focus になる。しかし, Granger (1983, p. 305) の指摘のように, 過去分詞の CD は, focus になっても, 動作主の CD ほど高くない。そのため(41)の hunting のようにさらに CD の高い要素が続くケースが多い。一方, 一般に動作主が明示されれば, その CD はもっとも高い。例えば, (42)の by phonies は不可欠な動作主であり, 省略できない。⁹⁾ そして(42)は (26 b) と同じ語順の擬似分裂文であるから, because 節全体が Rheme であり CD の程度が高い。さらに because 節の中で by phonies が Rheme であるから, これは, Rheme 中の Rheme と言える。

次の例は, 動作主の CD を高めるために, 直前にポーズを入れている例である。

- (43) I'll be all right in a minute, I'm just bewildered—(count five)—by life.

(T. Williams: *The Glass Menagerie*)

さて Firbas と Halliday の分析を受動文に適用すれば次のようになる。

- (44) a. $\frac{I}{Th}$ $\frac{was\ surrounded}{Tr}$ $\frac{by\ phonies.}{Rh}$
(Firbas)

- b. $\frac{I}{Th}$ $\frac{was\ surrounded\ by\ phonies.}{Rh}$
(Halliday)

- (45) a. $\frac{A\ free\ kick}{Rh}$ $\frac{has\ been\ given}{Tr}$
 $\frac{on\ that\ far\ side.}{Th}$ (Firbas)

(cf. 福田 1984, pp. 190-2)

- b. $\frac{A\ free\ kick}{Th}$ $\frac{has\ been\ given\ on\ that\ far\ side.}{Rh}$

(Halliday)

(44 a) の Firbas の分析では, CD の基本分布に沿ったクレッシェンドウがよく理解できる。なお(45)の例文は, Granger (1983, p. 310) から借用したものである。actor を rhematic な by 動作主に, そして goal

を thematic な受動主語にするという受動文の二つの機能を考えれば, (45)のような文はあまり多くはないが, 決して rare なものとは言えないのである。New で, 心理的に salient な要素を文頭に置く文は, 英語では決して珍しくはない。(45)と(4)との類似性に注目すべきである。(4)では into the room が Setting になり thematic であるのに対し, (45)ではその役割を on that far side が担っている。故に(45)は(4)同様「出現する現象」+「出現自体」+「出現の場所」の意味構造を持つと解釈できる。これは agentless passive と自動詞構文との間の共通性を示す例である。

6. 結 び

以上, Theme/Rheme 構造に関して特に興味深い構文の内いくつかを取り上げ, Firbas と Halliday の二つのアプローチを比較して来た。Halliday の特色は, Theme イコール「文頭で具体化される機能的意味」とする立場である。例えば, 従位接続詞なら, その機能的意味は 'dependence' であり, Structural Theme と分類される。Halliday は(脚注 4)に見られるように三種の Theme を区別する。中でも Topical Theme の概念は重要である。Thematic Progression の研究には, この概念が有効になるであろう。(47)のルールを設定して Theme の領域 (domain) を規定したことも注目に値する。次のような文の文頭要素も Topical Theme として理解できる。

- (46) $\frac{The\ following\ evening}{Topical\ Theme}$ $\frac{a\ party\ was\ given}{Rheme}$
 $\frac{for\ him\ by\ his\ parents.}{Rheme}$

(C. Webb: *The Graduate*)

(cf. 福田 1983, pp. 110-11)

(但し Halliday は(46)の Rheme 中の a party と his parents との情報上の価値, すなわち CD の程度は問題にしない。)さらに, Theme/Rheme を文の線性に基づいて固定することにより, Halliday は Firbas の理論にはない有標主題/無標主題の概念や, 有標, 無標の焦点の概念を駆使している。¹⁰⁾ 本稿で言及した問題点の一つは, (24)と(28)の解釈である。このような省略文に関しては Firbas の CD理論の方が理解しやすい。

Firbas は CD の程度に基づく Theme/Rheme 区

分であるから、次のような比較が上手くできる。

- (47) a. I met a young GIRL yesterday.
b. It happened YESTERDAY.

又、次のようなケースも一括して扱える。文の線性と彼の Theme/Rheme が別のものであることが明示されている。

- (48) a. $\frac{\text{There}}{\text{Th}} \frac{\text{was}}{\text{Tr}} \frac{\text{a boy}}{\text{Rh}} \frac{\text{in the room.}}{\text{Th}} (=37)$
(Firbas 1982, p. 99)
b. $\frac{\text{A boy}}{\text{Rh}} \frac{\text{came}}{\text{Tr}} \frac{\text{into the room.}}{\text{Th}} (=4) (ibid.)$
c. $\frac{\text{Into the room}}{\text{Th}} \frac{\text{came}}{\text{Tr}} \frac{\text{a boy.}}{\text{Rh}} (ibid.)$

さらに Firbas は Transition の概念を加えて三分法をとっているため、(3)や(44a)で示したような、CD のクレッシェンドゥを明示できる。

次に Firbas の理論に見られる問題点を整理してみよう。彼は CD の程度の決定に、文法的、意味論的、文脈的の三つのファクターの相互作用を利用している。この方法は、言語を包括的に把握する上で非常に重要なものである。しかし、この方法から生じてくる問題がある。すなわち Firbas は Theme/Rheme 区分の中に三つのファクターすべてを含めて表示しようとするために、どのような場合、どのファクターを第一とするかの決定が困難な場合がある。つまり、脚注2)でも少し触れたように、三つのファクターの優先順位の問題である。確かに、Firbas には、「文脈独立の All-New な文は意味構造で CD を決定する」というルールもある。しかし、そのためには、もっと厳密な意味構造に関するルールを体系化しなくてはならない。Pala (1974) が特に動詞型を中心にその作業を試みているが、いまだ不十分である。Firbas (1974, pp. 29-30) は、上記の三つのファクターに加え、音調が重要なファクターであることを認めている。その結果 Firbas は4つのファクターを考慮しなくてはならない。

次の例は音調に関して興味ある事実を示している。

- (49) I've been CHEATED by the dirty scoundrel.
(Quirk *et al.* 1985, 18.13)

(49)で言及したように、一般に動作主が明示されると、それが音調の核を持ち、Rheme Proper となる。しかし Quirk *et al.* は、(49)では、過去分詞が焦点になるのが自然な音調だと言う。そしてこの場合、動作主は 'mere expletive or evaluative force' である

と言う。Firbas の「ファクターの相互作用」に沿って(49)を分析すると、①文法的には受動文、②意味論的には、受動の意味を有する過去分詞 cheated と、動作主の the scoundrel、③文脈的には、文脈独立の cheated と、文脈依存の the scoundrel、④音調では、focal な cheated と non-focal な the scoundrel、となる。結果的に、CD の程度を決定しようとするれば①②と③④の間に矛盾が生じてくる。つまり Firbas の理論では、(49)の focus (すなわち Rheme Proper) を予測できない。

一般に音調は、話者の解釈 (interpretation) だと言える。そして、その解釈はまさに Firbas の三つのファクターの相互作用に基づくものであると同時に、さらに語と語のコンビネーション上の semantic weight に対する語用論的解釈が介在するのであり、その予測は微妙な場合がある。次の例はそのことを良く示している。¹¹⁾

- (50) a. The BELL is ringing.
b. JOHN has arrived.
c. The PRESIDENT has died.
d. A WASP has settled on you.
(Quirk *et al.* 1985, 18.13)
(51) a. The bell is GLITTERING.
b. John has FINISHED.
c. Someone has DIED.
d. A wasp has settled on your BACK.
(*ibid.*)

Quirk *et al.* によれば、(50 a-d) は主語 NP が 'known and named individual' か又は 'well-known' な存在であり、Predicate の方が 'a very general or commonly associated activity' (「出現」「死去」などを含む) であるケースである。しかも主語と Predicate の間の予測性が高い。(51 a-d) はその逆である。Firbas は、(50 a, b, d) は彼の言う「出現」に含めるだろうから、説明可能である。しかし(50 d)と(51 d)の音調の違いは説明不可能である。(51 d)も Firbas の枠組では「出現」の文である。(50 d)の you と(51 d)の your back とでは、後者の CD が高いことは、Firbas から言える。しかし Firbas 流の(51 d)の Theme/Rheme 分析は、A wasp(Rh) has settled (Tr) on your back (Th) とならざるを得ないだろう。つまり(4)や(45 a)と同じ分析である。

Firbas の理論は非常に有効な場合も多いが、ここ

に指摘した問題からもわかるように、今後さらに発展させるためには、意味論的規則の体系化と同時に、‘Prosodic Means of FSP’ としての音調の研究が重要となる。

* 本稿は昭和61年度新潟大学英文学会（9月20日）での口頭発表に一部加筆して、まとめたものである。

注

1) Halliday の Theme には二つの用法がある。広義の Theme は他動性 (Transitivity), 法 (Mood) に対して用いられ, ‘grammar of message’ を意味する。一方, 狭義の Theme は Rheme との対比で用いられる。本稿では後者の Theme を論じる。

2) Firbas でもっとも問題になるのは, この相互作用におけるファクターの優先順位であろう。このことは第6節で再びとりあげる。

3) (2)はCDの基本分布に反して Rh+Tr+Th となっている。頻度の点では(1)の型の方が多いと予測できるが, (2)はもちろん可能な文である。次例を参照されたい。

i) I knew at once what had happened.

A bee had stung her.
Rh Tr Th

(E. Caldwell: *The Visitor*)

(cf. 福田 1983, p. 109)

しかしこの種の不定主語にまったく制約がないわけではない。

ii) * An eight-foot-tall girl encountered John on the street. (Kuno & Kaburaki 1977, p. 654)

動詞 encounter が相互的な動詞であるから, 共感度 (Empathy) の高い要素を主語にすべきだと

説明される。marry や meet の場合も同様である。

iii) *A boy is tall. (Perlmutter 1970, p. 238; Thorne 1982, p. 483)

この文は, stative predicate での不定主語は generic な解釈しか許されないという理由で非文になる。

iv) * A girl was attacked by the mugger. (Kuno & Kaburaki 1977, p. 648)

iv) は「表層構造の共感度ハイアラキー」と「Topic 共感度ハイアラキー」の間の矛盾で説明されている (cf. Kuno & Kaburaki *ibid.*; 福田 1983, pp. 109-12). ii)~iv) も含めて, 不定主語に対する制約をさらに研究する必要がある。

4) Halliday による三種類の Theme

A. Topical Theme (=Ideational Theme)

主語, 目的語, Circumstantial Adjuncts (場所, 時, マナー等)

B. Textual Theme

1. Continuative Theme (yes, no, well, oh 等)
 2. Structural Theme (接続詞と関係詞)
 3. Conjunctive Theme (接続副詞)
- 1 → 2 → 3 のように並ぶのが普通。

C. Interpersonal Theme

1. Modal Theme (法副詞)
 2. Yes/No 疑問文の文頭に来る定動詞
Wh 疑問文の文頭の Wh 要素
 3. Vocative (文中のどの位置にでも生じる)
- 1 ~ 3 の順序は無関係。

Halliday における最大限拡張された Theme/Rheme 構造は次のようである。下の表参照。

5) これに関連して Halliday (1967, p. 214) は, 疑問文内部での話題化 (有標主題を作ること) が不可能であることを示している。

Well	but	then	Ann	surely	wouldn't	the best idea	be to join the group?
B 1	B 2	B 3	C 3	C 1	C 2	A	
textual			interpersonal			ideational	
Theme							Rheme

- Firbas, J. (1961) "On the Communicative Value of the Modern English Finite Verb," *Brno Studies in English* 3. Prague. pp. 79-100.
- (1965) "A Note on Transition Proper in Functional Sentence Analysis," *Philologica Pragensia* 8. Prague. pp. 170-6.
- (1966^a) "On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis," *Travaux Linguistique de Prague* 1. pp. 267-80.
- (1966^b) "Non-Thematic Subjects in Contemporary English," *Travaux Linguistique de Prague* 2. pp. 239-56.
- (1975) "On the Thematic and the Non-Thematic Section of the Sentence," Ringbom, H. et al. (eds.) *Style and Text*. Stockholm: Språkförlaget Skriptor AB. pp. 317-34.
- (1982) "Has Every Sentence a Theme and a Rheme?" Anderson, J. (ed.) pp. 97-115.
- 福田一雄 (1983) 「英語主語の機能論」『新潟大学教養部研究紀要』第14集 pp. 105-16。
- (1984) 「不定主語を持つ受動文の機能について」『中部地区英語教育学会紀要』第14集 pp. 187-94。
- Granger, S. (1983) *The Be + Past Participle Construction in Spoken English*. Amsterdam: Elsevier Science Publishers B. V.
- Hajičová, E. (1983) "Topic and Focus," *Theoretical Linguistics* 10. pp. 268-76.
- Halliday, M. A. K. (1967) "Notes on Transitivity and Theme in English, Part 2," *Journal of Linguistics* 3. pp. 199-244.
- (1970) "Language Structure and Language Function," Lyons, J. (ed.) *New Horizons in Linguistics*. Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books Ltd. pp. 140-65.
- (1974) "The Place of 'Functional Sentence Perspective' in the System of Linguistic Description," Daneš, F. (ed.), pp. 43-53.
- (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold Ltd.
- Hinds, J. (1975) "Passives, Pronouns, and Themes and Rhemes," *Glossa* 9: 1. pp. 79-106.
- Kuno, S. & E. Kaburaki (1977) "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* Vol. 8. No. 4. pp. 627-72.
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』東京：大修館。
- Pala, K. (1974) "Semantic Classes of Verbs and FSP," Daneš, F. (ed.), pp. 196-207.
- Perlmutter, D. M. (1970) "On the Article in English," Bierwisch, M. & K. E. Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*. The Hague: Mouton. pp. 233-48.
- Prince, E. F. (1981) "Toward a Taxonomy of Given-New Information," Cole, P. (ed.) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press. pp. 223-55.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Thorne, J. P. (1982) "A Note on the Indefinite Article," Anderson, J. (ed.) pp. 475-84.
- 安井 稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』東京：大修館。